

金峯神社

金峯神社は口永良部島の主要な神社で、神主がいる島で唯一の神社です。その土地からは縄文時代（紀元前 10,000 年 - 300 年）の遺跡が見つかっており、古代からこの場所に人々がいたことを示しています。

設立

十一世紀後半ごろから、隼人と呼ばれる人々は日本本土の一部である九州の南端にあった開聞岳を崇拝していました。開聞岳は九世紀後半に大噴火を経験しており、火の神が住む聖なる山であるとみなされていました。この隼人の人々は、島を火山から守るため、口永良部島の金峯神社建設のための寄付金を集めたということが言われています。

この神社は金山比古命と金山比女命という、火山噴火を止める神力を持つと信じられている男と女の山の神を祀っています。彼らはまた、鉦山と鉦夫の守り神でもあります。彼らは口永良部島で硫黄の採掘が栄えた 1860 年代から 1940 年代初頭まで祈りの対象となっていました。

祭り

新岳は 1841 年、太陰暦の第四の月の三日目と、第六の月の十五日目に噴火しました。以来、これらの二つの日付には山々を鎮め、噴火を防ぐことを目的に祭りが開催されてきました。春の祭りは現在では開催されていませんが、島民が相撲の取り組みに参加したり、踊りを舞ったりして神々に奉納していました。夏の祭りは現在でも行われていますが、島民は神々に踊りを奉納します。棒踊りでは、男性たちが半身もしくは全身の長さの棒を持って、互いに対峙します。日の本踊りでは、女性たちが日本の日の丸が描かれた扇子を持ち、平和のための祈りとして、中世日本を支配していた平家が敗退した戦いの一つである、一ノ谷の戦いのことを詠った歌に合わせて踊ります。

景観とデザイン

金峯神社は山々や海、また集落を見下ろす高い丘の上 - 山々を護り、海の安全を確保し、集落を守るには最適な場所 - にあり、日本古来の自然崇拜の典型となっています。神社の聖域には象の頭と蓮の花のデザインをあしらった白い梁がありますが、これはインドの影響であると信じられており、おそらく奈良の金峯山寺で修業した山伏によって持ち込まれたのであろうと考えられています。階段の前には山岳信仰と仏教を融合させた混交宗教である修験道の守り神、蔵王権現を表す像があります。山伏として知られる修験道の行者たちがこれらのモチーフを金峯神社にもたらしたと信じられています。